



Title	巻頭言 : 看護とエビデンス
Author(s)	牧本, 清子
Citation	大阪大学看護学雑誌. 2002, 8(1), p. 3-3
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56735
rights	©大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

卷頭言

看護とエビデンス

Nursing and "Evidence"

エビデンス、EBM (Evidence-base Medicine、根拠に基づく医療)、EBN (Evidence-based Nursing、根拠に基づく看護)、EBP (Evidence-based Practice、根拠に基づく実践)など流行語というよりも、言葉として定着してきたようである。エビデンスは根拠と訳されているが、データを疫学的に分析・解釈することが基本である。「根拠に基づく」と接頭語につくようになったのは、「根拠に基づかない」医療や看護であったことを認めているからであろうか？

院内感染の管理は、比較的早くから根拠に基づく実践が行われた分野である。院内感染管理の研究は150年以上も前のゼンメルワイスにさかのぼる。微生物の存在が明らかにされる前に、手洗いが産褥熱の予防に効果的であることを立証した人である。残念ながら、彼の功績が認められたのは近代になってからである。エビデンスの立証には、データで効果を見せるだけでは十分でないことは現在でもあまり変わっていない。喫煙の害が疫学的に立証されたのは50年以上も前であるが、タバコの製造会社が裁判で敗訴するようになったのは1990年代になってからである。エビデンスとは何か、ゆるぎないエビデンスとして引用できる基準は確立されていない。現在、複数の無作為対照比較試験 (RCT) か、大規模なRCTがエビデンスのレベルとして一番高く設定されている。

看護ケアに関する院内感染のエビデンスで、RCTで立証されたものは少なくない。ガウンやマスクの使用と院内感染の発生率などに関するものは、多くのRCTが行われている。布性のガウンは細菌でも容易に通過することができるので、白衣の汚染や保菌者の菌の拡散による感染を防止できない。また、易感染患者の感染の主な原因是患者の常在菌であることが多いので、厳重な逆隔離の感染予防効果は少ない。米国では院内感染のエビデンスを集積し、ガイドラインとして臨床で活用されているが、日本ではガイドラインの翻訳が行われるようになったところである。日本では、RCTそのものが未発達であること、ケアの第三者の評価を行う文化が存在しなかったことなどが問題であろう。

エビデンスを検証し集積していくことは、保健学科の博士課程の重要な役割の一つである。しかし、保健学科の重点化や大学の独立行政法人化と他の課題も山渉みである。日本の大学は国際的な競争力をつける必要があると言われているが、少ない教官の数と予算で米国の大学とまともに競争はできない。米国のジョージア州立大学看護学部の予算は年間5億円という話を聞いたことがある。また、米国のトップレベルの看護大学は100名以上の教官を抱えており、教育に関する国の方針が大学の予算や教官の人数に反映しているのであろう。日本では予算は減少し教官の数もさらに減ることが予想される中、重点化や独立行政法人化を乗り切る対策を考えると共に、これから看護教育の目標を考えなおしてみる必要があると思われる。

平成14年1月

大阪大学医学部保健学科

成人・老人看護学講座

牧本清子